



《陽が昇る日》油彩 50F  
 第48回昭和会展東京海上日動賞受賞作品  
 「パリから100キロ南の村エティニー・ヴェロン」の風景です。本当に  
 何も無い場所。だからこそ僕には感動の多い土地でした」

**松村** 山内君、東京海上日動賞おめでとう。  
**山内** ありがとうございます。お腹はすいてますけど、胸はいっぱいです。昭和会には学生の頃から何度も出品しましたが、ずっと落選してきました。今回は自信を持って出品した作品だったので、それが認められて本当にありがたいです！  
**松村** その賞の審査はとても緊迫したと伺いました。絞られてからが大変でした。そうですね、南島先生。  
**南島** 全くタイプが違う作品で賞が競われたんですが、特に山内君の作品に対する評価は、真つ二つに分かれました。彼が描いたヒマワリの作品が、ゴッホに似ているとって批判する方がいらしたんです。  
**松村** 私はコレクターとして一票を預かっているんですけども、率直に「ああいい絵だなあ」と思ったので、票を入れることはすぐに決めていたんです。実際、19人のうち10人が彼の作品に票を入れていました。ところがですよ、最終的に作品が3点に絞られたところで、一部審査員の方が、彼の作品について厳しいことをおっしゃった。ある方が「僕は異論がある。あまりにもゴッホに似すぎている」というようなことを仰られた。そしてもつと辛辣な批評をされた方もいらっしゃいます。そこまで聞くと、この絵に賞を与えることはいかがなものか、と考えるをえなくなりますよね。



左から、洋画家・中山忠彦、受賞者の山内大介、プリヴェ企業再生グループ社長・松村謙三、日動画廊副社長・長谷川智恵子、美術評論家・南島宏の各氏

巨匠への第二步  
 昭和会展・最新世代の魅力——⑥

撮影：安達康介  
 本文構成：丸山がおり  
 取材協力：ホテルオークラ東京「ささんか」

第48回展  
 「東京海上日動賞」  
 山内大介

昭和会賞、松村謙三賞に続く東京海上日動賞。平成25年のこの賞は、黄色い大地が印象的な山内大介「陽が昇る日」が受賞した。実は審査会では賛成と反対の激しい意見の対立を引き起こした、いわば問題作。松村社長をはじめ彼の作品に魅力を感じ、応援の声を上げる各氏が、若き異才の真価を語る。

【ホスト】

- 松村謙三（プリヴェ企業再生グループ代表取締役社長・大阪大学 知的財産センター 招聘教授）
- 中山忠彦（洋画家・日本芸術院会員）
- 南島宏（美術評論家・女子美術大学教授）
- 長谷川智恵子（日動画廊副社長）

審査を二分した骨太の油彩画

しかしそのとき私は、いや待てよ、そこまで厳しく言うのはなぜだろう?と思った。そしてその場で審査員の方々に向き直ってこう言いました。「とはいえ10人の票が入っているんだから、その辛辣な意見だけをただ黙って聞いているだけなのはおかしいですよ。どなたか、ぜひともその反論をお願いします。私はコレクターとしてぜひ聞いてみたい」と。

**南薫** しばらく会場が静まり返ったあと、中山忠彦先生が「僕は票を入れたひとりだ」と話を始められた。

**松村** それでまた空気がバツと変わった。あのときの中山先生のお話にはとても感動した。だからね、山内君、中山先生がいなかったらこの受賞はなかったかもしれないよ。(笑)



やまうち・だいすけ  
1981年三重県四日市市生まれ。  
2005年名古屋芸術大学卒。07年同大学院修士課程修了。08年白晝会友に推挙。中日賞受賞。09年白晝会準会員推挙。個展、グループ展多数。現在、白晝会準会員。

## 僕には絵を描くことしかできなかった。いまでも直感だけで描いています——山内大介

**中山** 私は内心ドキドキしていたんですよ。というのは、自分と同じ白晝会の出品作家だから、身内としては推しにくいからです。しかしながら、最近白晝会が細密表現を代表する団体のようになされていることに不満を感じている私にとって、彼の作風はとても貴重なものです。たとえば髪を描くにしても、毛の1本1本を描かずとも、いくらかでも表現の仕方があるのに、今は些末なところを誇るような細密表現に傾いている時代です。そんな時代だからこそ作家、コレクター、画廊に対して、一石を投じておかないとあとで後悔することになると思います。

**長谷川** 白晝会にあれだけ細密描写の作家が増えてきたなかで、そのトップである中山先生が山内さんの作品を擁護されました。その断固とした口調に、非常に重いものを感じましたね。

——反対意見を克服しての受賞となったわけですね。

**長谷川** 主催者としては、審査の場でディスカッションがあるというのは、本来にいいことだと思っています。そういう



《ひまわり》油彩 10F  
昭和会展の審査会で意見を分けた作品

う議論があるのは、審査員の皆さんが真摯に作品批評をしていらつしやるからです。右へ倣えという号令で、簡単に賞を出しているわけではない、という表れです。それを示してくれたのが、山内さんの作品だったと言えます。

**南薫** 批判というのはある種の賛意なんです。つまり、すべての審査員にとって気になる作品だったのではないかと気がします。

**持ち味は野生? それとも自然?**

——では山内君の作品の魅力とはなんでしょうか。

**南薫** 中山先生のお話にもありましたが、今これだけ原子の世界、粒子の世界という時代にあつて、彼はわれわれに絵のにおいというものを思い出させてくれた、というのが僕の率直な印象です。僕は審査のとき、たとえゴッホに似ていたとしても

それは問題ではないと思つてずっと手を挙げていました。今日また彼のポートフォリオを見ていたら、ゴッホに似ているという批評は全く見当違いだったんじゃないかと改めて思いますね。

**中山** あの時「ゴッホのヒマワリとは違いすぎるよ」と言っただけ、そりゃ違つて当たり前だよ。(笑)

**南薫** 少なくとも僕は、観る側の立場として「絵とはこういうものであつてほしい」という思いがある。その理想とする絵がどんなものであるかなんて、誰にもわからないものなんだけれども、でも、こうあつてほしい、そして描く人にはこうあつてほしいというような、観る側の「夢」とでもいうような願望があるんです。彼は、表現が骨太だし、作品全体を通じて、そのイメージを体現しつつある若き画家だという感じを持ちました。

**中山** 彼はこういう人柄の男ですから、わりと誤解されやすい。非常に自然児で、野蠻っていうか、

多少礼儀知らずっていうか……今日もネクタイをしていないでしょう(笑)。私は彼のそういう性格も、作品も非常に愛しているんです。私の家内は非常に礼儀にうるさい人間なんですけれども、彼女もなぜか「大介、大介」って可愛がつっている男として、人間としてよほどの魅力がある証拠だと思っています。

**山内** 僕は子供の頃から、おとなしく集中しているものが絵を描くことしかなかったんです。ただ、校内で写生するにもモチーフを求めて場所探しに人一倍時間がかかってしまった。みんなが給食を食べている時間にも、校庭で絵を描いていました。中学生の僕に油絵を教えてくれる方との出会いがあつたり、あらゆる場面でいろんな選択肢の中からいつも絵を選んできました。大学に入ってからはいよいよ絵を描こうとは思っていたけれど、やっと集中できたのは4年生になってからです。ポートフォリオを見ていただくかわかりま

すが、学生の頃はない知恵をしぼつてあつちこつちに迷つていました。大学を出る前、教授に「どうせ賢くないんやからあんま考えんと直感で画面に向かつて勝負したら」と言われました。もう大学院を出て5年経ちますが、ずっと直感で描いています。

### 何にも媚びない昔型の画家

——石垣定哉さんが恩師だそうですね。

**山内** 予備校時代に初めて画集を見て、「いろんな作品を描く人がいるんだなあ」と印象に残っていたんです。そうしたら大学で客員教授としていらつしやつたので、金魚のフンみたいに後ろをついていつてました。先生と一緒に三重県の朝熊山に登つてスケッチしたことがあります。藤島武二も描いている風景なんですけど、僕がスケッチブックと財布、鉛筆1本しか持つていなくて「これで表現できるかなあ」と考えていた隣で、石垣先生はいきなり水彩絵具でスーッと気持ちよさそうに描き始めた。その姿を見て「絵描きだなあ」と思いました。いつ何に出会ふのかわからないんだから、常に水彩絵具は持とうと思ひましたね。

**長谷川** 石垣先生は、今の画壇では珍しい、昔ながらの画家ですね。絶対に写真は使わずに、実際に見たものだけをお描きになる。お酒も大変お好きで朝までお飲みになるところも昔風。山内さんは今の絵につながるのびやかさを石垣先生から学ばれたんじゃないかしら。

**南薫** さつき中山先生が、自分の所属する白晝会



犬のピート スケッチ



いずれも2010年に訪れたフランスでのスケッチ

の弟子であることもあって「礼儀知らずです」という言葉を使われたけれども、それは実はとても大事なことです。実は無骨であることこそが、芸術家にとって最高の礼節なのではないかな、と僕は思うわけです。そういう片鱗を彼の絵から感じました。だから彼には媚びを見せずに、無礼であり続けてほしい。

**中山** 彼は私が主宰するアカデミーでも異色で、私自身の理想だなあと思ったりもします。アカデミーでは、人物画、デッサン、静物などいくつかのコースがあつて、受講者は自分の描きたい方向にあわせて講座に所属するんだけど、彼をそこに見かけたことはないですよ。彼はどこか道端に座り込んで風景を描いたり、部屋の隅っこでタマネギを描いたり、本当に描きたいものを、気持ちの赴くままに画面に向かう。非常に自然な状態ですよ。それは私自身が非常にうらやましいですよ。**松村** あれだけの賛否両論を巻き起こしたんだから、アクの強い個性的な人物のはずですよ。それが絵に出てくるんじゃないかな？ 大成する人間は決して媚びないからね。**中山** よかったなあ(笑)。**山内** はい。

### 取材先での出会いと感動を描く

——受賞作《陽が昇る日》はフランスが舞台ですね。

**山内** 30歳を目前にして何かしたいと思って、日本よりもずっと昔から油絵があつた憧れの地を

すっかり見たくてフランスに行きました。パリには観光程度には行ったことがあつたけれど、そのときはパリから100キロほど南、ブルゴーニュ地方のヴェロンというところにリュックサックひとつで行きました。丘があつて、自転車を少し走らせるだけで、日本とはスケールの違う風景が広がる。フランスは、パリ以外はみんな緑、ヴェロンも本当に田舎で、本当に何も無い。だからこそ僕には感じるものが多い土地でした。

**長谷川** 私もかつてフォンテンブロー

まつむら・けんぞう  
プリヴェ企業再生グループ株式会社  
社代表取締役社長。他に大阪大学  
法科大学院招聘教授。大阪大学  
知的財産センター招聘教授。経  
済同友会金融市場委員会委員も。  
今秋、「松村謙三美術館」を清里  
にオープン予定。



### 山内君の持ち味は媚びないことだね。

他人に媚びないし、自分の画風にも媚びていない。

そこがいい——松村謙三



《陽光の麦畑》油彩 100F  
今年の第89回白日会展出品作で、寄託賞のひとつオンワードギャラリー賞を受賞

### 自然児で、野蛮で、礼儀知らず……。

そういう性格も含めて愛されるのが彼です。

礼儀にうるさい私の家内もファンなんですから

——中山忠彦



《バラ》油彩 6F 2012年

らしいきれい。

**南島** 僕はサン・ヴィクトワール山の山の上にテント張って泊まったことがありますよ、セザンヌのモデルになった気分だね。

**山内** 昼間は、青空に山が張りつくくらい鮮明できれい。夕方になると山は赤くなり、夜8時くらいまで描いていたら帰れなくなって、通りかかった車に乗せてもらったりもしました。出会いは他にもあつて、ものすごい雨が降った翌日、すごく晴れた日に出かけていたら、リングゴの木の下に僕と同じ年頃の女の子が犬を連れて座ってたんです。あちらでは知らない人とも気軽に挨拶をするから「サヴァア(元氣)？」と声をかけたら「ピアン(とっても)！」と返してくれたので、なん

かちよつとほのかな甘い気持ちになって、絵を描かせてもらったんです。2時間くらい、辞書を片手に話をしました。歳をきいたら17歳だったので、

ませてるなあとびつくりしたりして。《陽が昇る日》という自分でもよくわからないタイトルをつけましたけど、雨上がりのすごく晴れた日とちいさな出会い、その気持ちが出た作品になりました。麦畑もたくさんスケッチしたんですが、当時のスケッチを見返すと刈り取りは終わっていた時期なのに、大地が黄色。大地が輝いていて、タブローにするるとこんなに黄色になりました。

**長谷川** 今では絵になりそうな場所をカメラにパッパッと記録して、コンセプトありきで制作しながら作品を語る、というような傾向が一般的に強いから、風景を見た感動を描きたいというのは、最近の若い作家では稀です。長く滞在して、場所の空気を得た風景画っていいですね。

**中山** 本当はそれが絵の原点なんだけどね。カメラには、そのときに何を感じたかということまでは映らない。感動のない光景を転写した作品に、感動が映し出されるはずありませんよ。

**長谷川** 今回の受賞は、そういう感動を描くことは古臭くないんだ、原点は「感動」なんだ、と確



なかやま・ただこ  
洋画家、日本芸術院会員、日展理事  
長、白日会会長。1935年福岡  
県生まれ。高校卒業後上京、伊  
藤清永に入門。54年日展入選。  
58年白日会会員。65年の結婚以  
来、良江夫人をモデルにして描き続  
ける。

認する意味もあつて、主催者としてはうれしかったです。

**南島** 今の芸術家に欠けているものは「旅」ではないでしょうか。岡倉天心の日本美術院にしても、荒木十畝のいた東京派にしても、当時の日本の画家たちはあの交通事情の発達してないなか、ほんとうによく写生の旅をしています。スポンサーを探すというような意味合いもあつたのかもしれないけれど、原初的な感動を採集して作品に表現するという行為ではなかったかと思うんです。直裁の感動をするような「美術の力と旅」っていうのはとてもおもしろいテーマです。

**山内** フランスの風景を描いた作品は、北海道の風景に似てる、といわれるんです。地形がブルゴーニュ地方も、実際に北海道に似ているらしいんです。でも僕は、自分がいるその場所が「フランスだー！」と思いがら描く絵は意味が違うと思っっています。現地に行くのは、本物を味わいたい、という一点に尽きる。あの風景が僕にこういう絵を描かせてくれていただけです。この作品も、だから賞を頂けた。

**中山** 非常に謙虚だね。彼には他人にどう思われたいか、なんていう考えは全然ない。

## 彼はわれわれに絵のにおいを思い出させて、 観る側の「夢」を体現してくれる——南畝宏



みなみしま・ひろし  
美術評論家。第53回ベネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、国際美術評論家連盟理事、全国美術館会議理事等を歴任。現在、女子美術大学教授。1957年長野県生まれ。

**山内** 風景はいつの時代にもあって、現代もそこにある。それを僕が描けば現代の風景画になるはずです。だから作風を固めようと思っていまません。その意識が自然なことではないし、自然体で描いていつて振り返ったら作風がある、というのがいい。絵の具のことなら例えばベラスケスは、絵の具がきれいで、ズームにすれば抽象だけど、離れるとしっかりと像が見える。だから絵が強い。それが絵の具の強さなんです。写真に撮るとよく見えて、実際に見ると貧弱な作品というのがあります。

**南畝** いつからそういう意識を？

**山内** 中学2年生のときに、生でゴッホの絵を見



《夜の蟹江川》油彩 15F 2008年

たときですね。画集でゴッホを見ていても、何がいいのかわからなかったんですが、生の絵には食らいつくほど見た。まず、絵の具がきれいで、画面が輝いていて、強い抵抗感のある壁面のようにでした。ああいう強い絵を描きたいと思って憧れていました。

**長谷川** 感動というものが作品を作る。そして描いた人の感動が、作品を見た人に感動を与えるところというのが絵画の本筋でしょうね。山内さんの魅力もそこにある。だから彼には伸びてほしいと思っています。ルネサンスからもう500年も経つのに、今もその作品は見る人に美しいと思わせるでしょう。一方でレンブラントの作品と、その弟子や仲間たちの作品とは、同じテーマを扱っていても観る人の感動には違いがある。テクニクで追いつけたとしても、贋作が感動を与えないのと同じ、不思議なメカニズムです。

### 画壇のドン・キホーテ

**松村** 展覧会を見ると、彼の絵は一番明るいけども、ただ明るいだけじゃないよね、何かがあるよね。君の絵はほんと、おっと思わせる。

**長谷川** あるコレクターの方が、賞をとる前に山内さんの作品をお買いになりました。その後受賞が決まると「自分の目は確かだった！」と喜ばれ

**南畝** 彼の画家としてのあり方に新鮮味があるのは、画壇のドン・キホーテみたいな蛮勇があるせいかな。無謀なのに描ききってしまう。不思議な勇気ですね。

はじめに地面から生えているところ、うしろに青空がぱつと広がっているところから、切り取って部屋の中に持ってきてみると、どんな彫刻家もびっくりするくらい強い立体で、どこから取り掛かったらいいのかわからなくて、なかなか絵が描けない。僕は中山アカデミーで、一度ヒマワリに負けて、いい作品が描けなかった経験がありました。だからこそ挑戦したかった。枯れたヒマワリには心が入りやすく描きやすかったけど、僕は元気なヒマワリに挑戦したかった。審査のときその作品が問題とされたのは、僕の力が足りなかったからです。ゴッホは枯れたヒマワリと生きたヒマワリをいっしょに描いて、ヒマワリの一生をあらわしたりしているけれど、僕は、真正面からぐつと体当たりしたいという思いで描きました。下手にいろんなもので構成したくない。その生命力、強さをどうにかして表したい。まだ試行錯誤中ですけど。



はせがわ・ちえこ  
日動画廊取締役副社長。日本洋画商協同組合理事長をつとめたほか、95年多年の日仏交流が評価され、フランス政府よりレジオンドヌール・シュヴァリエ勲章を受章。「気品磨き」などの著書多数。

## 絵画の本筋は、描いた人の感動が、 作品を見た人にその感動を 伝えることなのです——長谷川智恵子

**山内** はい、この美味しいシャンパンが僕をしゃべらせているんだと思います。(一同爆笑)

**中山** 緊張してると思ったら、今日は意外によくしゃべるね(笑)。

**山内** はい、いろいろな意見があることを、胸に留めていきます。でもそれに影響されることなく、僕自身の作品を描いていきます。



《エティニーの夕暮れ》油彩 20M 2011年



《鈴鹿山青雲望む》油彩 100P  
2010年第86回白日会展出品作 アートもりもと賞を受賞

ましたね。

**中山** 白日会にはいくつかの画廊が独自に授ける寄託賞というのがあります。それには僕らは関与しませんが、今年ある画廊が山内君を選んでくれました。「おお、よくやってくれたなあ」と喜びました。

**山内** あれは一番いい場所に絵を飾っていただいたおかげです。

**南畝** 出品作のあのヒマワリは、ゴッホへのオマージュという意味もあったの？

**山内** 正直に言いますと、この調子で風景を描いていると、出品作が風景だけになりそうだから、風景だけにまとめたくなかったんです。ヒマワリは、ぶん前、静物画の課題のために花を買いに行ったとき、ヒマワリが道々に点々と咲いているのを見つけて、持ち主にお願いで譲っていただいて描いたのが、真剣に向き合った最初です。「あれ欲しい！あれならモチベーションがあがる、あれなら描きたい！」と思ったんです。

風景は現場で体感するものの中に入っていると、ヒマワリは、実際に切りとって目の前に置くと、かなり強い花。バラみたいな、女性的な曲線や繊細さはなくて、主張が強いんですよ。